No. 3 内野知樹　「ほころぶ」

一つの写真作品シリーズとして「ほころぶ」というタイトルで制作してきた。
社会のほころびを写真で浮かびあがらせるということを目的にしている。
非常に写真的なアプローチでテーマに沿う写真を時には泊りがけで出かけ、ひたすら歩き回り対象を探し続けた。
ゴミ、廃車、廃墟、漂着物、忘れ去られたモノ、明らかに異質なモノ、死骸。
数年前に四谷の写真ギャラリーで同タイトルで個展を開いた。
30 点ほど写真をセレクトし、ファインプリント、フレームにマットという定番の額装をし横一列、ギャラリーの壁面に並べた。
あまりにもありきたりな展示だけれど、それはそれで間違っていたとは思っていない。
写真とはそういうものだろう。
けれど、その先に何があるかというと少し疑念を抱いている。
新しい被写体をまた探し回って、枚数が集まったら展示をすればいいのか。
それでは面白くない。
並行していくつかの作品を制作していて、新しいほころぶの陰影が見えてきた。
ほころびを浮き上がらせたとして、それで終わらせるわけにはいかない。
私自身もこの社会の一員であるし、再生を想起させるような作品にこそ伝えたい事がこめられる。
別の作品で始めたことは和紙を使用すること。
ストレートに写真をプリントすることが基本なのだけど、和紙の切れ端を集めてもう一度一枚の紙にすることを学んだ。
直接的すぎるけれど、再生した紙を使用することでポジティブなメッセージに変えることができるかもしれない。
和紙ではなく日常の生活で発生する沢山の紙を使用することにした。
これで大きな紙を作り、そこにプリントできたらかなりのインパクトを出せる。
そう思いつつ今はハガキサイズしか制作できていないのでどのような形にするかこれからの課題だ。

展示を終えて

今回の展示の作品の仕上げとしてリサイクルショップで買い集めた数百円の中古のフレーム、マットの代わりに和紙の再生紙を使用した。
それはそれで再生という意味を込められているので、一つの展示の仕方として納得している。
もっと大きな作品にできないか？
それが展示以前に課題としてあったのだけど、大きいだけがすべてではないということを学んだ。
このハガキサイズの作品でも伝えられないことはない。
他の展示者の作品で継ぎはぎのようにして大きな作品にしているものがあって、そういうやり方もあるかと学べたことも大きな収穫といえる。
この「ほころぶ」という作品がどう変化するか、自分でも楽しみだ。